

7月2日 年間第13主日

知 1:13-15, 2:23-24 II コリ 8:7-9,13-15 マコ 5:21~43

1. 知

生きることは神の祝福であって、神の本性に与かることなのだ、今朝の初めの朗読で聞いた知恵の書は語っています(2:23)。しかし現実の世界には死が入って来ていて、だれも最終的にはこれから逃れることが出来ません。それは本来の神の創造の御業に反することであり(2:24)、人は“死からの救い”を神に求めます。

vv.13-14 「神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない。生かすためにこそ神は万物をお造りになった。」

2. マコ

今朝の福音書のテキストには、イエスの行われた二つの奇跡物語りが、一方が他方の途中に挿入された形で語られています。

会堂長の一人でヤイロという名の人がイエスのもとに来て、その足もとにひれ伏してお願いしました。「私の幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」(v.23)。

イエスがヤイロと一緒に彼の家へ行かれる途中で、もう一つの出来事が起こりました。12年間も病んでいた一人の女が、群衆の中に紛れ込んでイエスに近づき、イエスの服に触れたのです。「“この方の服にでも触れればいやしていただける”と思ったからである」(v.28)と、聖書は伝えています。「イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて……」(v.30)とあるように、彼女がイエスの服に触れると直ちにいやしが起こりました。そしてイエスは言われました。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。」(v.34)

この出来事で手間取っている間に、ヤイロの娘は息を引取りました。「会堂長の家から人々が来て、言った。“お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。” イエスはその話をそばで聞いて、“恐れることはない。ただ信じなさい”と会堂長に言われた。そして、……一行は会堂長の家に着いた。」(vv.35-38)。

イエスが来られるところには、“生きる”ことが訪れることを、この奇跡物語りは語っています。「イエスは……家の中に入り、人々に言われた。“なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。”」(v.39)

娘は実際には死んだのであって、単に眠っているのではなかったはずですが。しかしイエスが来られると、娘は死の眠りから再び“生きる”ようになる！ 人々は驚きのあまり我を忘れませんでした。

3.

救い主イエス・キリストへのひたすらな信仰が、この二つの奇跡物語りを貫いています。“生きる”ことが救い主イエス・キリストから与えられる……ということは、それが復活の命、永遠のいのちと関わっていることなのだということを、私たちは思いましょ。この地上の“生”は死から逃れることが出来ませんが、しかも主にあっては、“生きる”ことが終わりの日に約束されている永遠のいのちを、指し示し証しすることになるのです。

私たちも皆、主イエス・キリストへの信仰によって生かされて、人生を歩んでいます。教会に属する信者一同は、お互いの信仰によって励まし合いながら、主にあって“生きている”のです。ですから教会では、私たちは互いに助け合うことにも心を用います。大切なのは主イエス・キリストへのひたすらな信仰であって、それは神の国への復活に至る命を、主を信じるすべての人々に与えます。

4.

私たちキリスト者は、主イエス・キリストの再び来られる終末の日を切に待ち望みつつ、この地上の人生の旅を続けています。ですから私たちは主日ごとに主イエスの死と復活の記念のミサを守りながら、その中で祈るのです。「また、復活の希望をもって眠りについた私たちの兄弟とすべての死者を心に留め、あなたの光の中に受け入れてください。」(第二奉献文)

私たちがその地上の人生の旅の途中で再臨の主をお迎えすることになるのか、それともそれはまだ先のことなのか、だれにも分かりませんが、主はキリスト者が“共に生きる”ために助け合うことを求めておられます。「“多く集めた者も、余ることはなく、わずかししか集めなかった者も、不足することはなかった”と書いてあるとおりです。」(Ⅱコリ8:15)。 アーメン、ハレルヤ。

7月9日 年間第14主日

エゼ 2:2~5 IIコリ 12:7b~10 マコ 6:1~6a

1. マコ

主イエスが神の国の福音を宣べ伝えてその公の活動を始められて間もなくの頃、ある安息日に弟子たちを連れて故郷の町にお帰りになりました。既にイエスはガリラヤ方面ではかなり有名な存在であり、神の力によって多くの悪霊を追い出しておられました。イエスを救い主として信じる信仰が人々の間に生まれつつありました。

しかし、故郷の町ナザレでは事情が違いました。人々はあまりにもよくイエスを知り過ぎていました。人々にとってイエスは同郷の仲間であり、彼ら同郷人の中の一人に過ぎませんでした。イエスについて知らないことは殆ど何もないはずでした。

vv.2-3 「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、……、……ではないか。」

故郷の人々は、イエスについて既に十分に知っていると思っていたために、神の子としての主イエスを理解することが出来ませんでした。福音書はその有様を次のように報告しています。

vv.5-6 「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。」

2.

このような状況を“不信仰”という言葉で表現をするなら、この言葉が当てはまるような場面は私たち現代人にとっても決して無縁ではないばかりか、むしろ日常的でどこにでもあることのように思えます。

人々の不信仰が、神の国の福音を“理解出来ないもの”にしてしまっています。不信仰という世俗の力が支配しているので、現代人には主イエス・キリストの死と復活が理解できない……。聖書を、それが書かれているとおりに読み、語っているとおり聞くということが、現代人には困難に思える……。この“不信仰”という現実にはあまりにも強力で、この現実の壁の前で現代の教会は妥協を強いられて来たというのが事実に近いのではないのでしょうか。

今朝の朗読聖書の他の二つのテキストは、このような現代の教会に向かって、状況を全く別の面から見ることを教えてくれるのです。

3. IIコリ

先ず IIコリにおいてパウロは、「(神の)力は弱さの中でこそ十分に発揮される」(v.9) と述べています。使徒パウロにはその働きにとって致命的とも言えるような持病があったようです。彼は手紙の一節で、「わ

たしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあった……」(ガラ4:14)と記しています。彼がこの病から解放されることを切望して、どんなにしばしば主に祈ったかは十分に理解できます(v.8)。しかしこの現実を変えることが出来ず、彼の方がこの現実と妥協せねばなりませんでした。彼の働きを通して神の力は十分に発揮され、いささかも妨げられてはいないことを、神は彼に承認させてくださったのでした。

4. エゼ

慰めは神から来ます。預言者エゼキエルの宣教は、イスラエルの人々に聞き入れられるよりもむしろ拒まれる傾向がありました。エゼキエルは自分の預言者としての活動の成果から、慰めを得ることを期待出来ませんでした。しかしそのような現実の状況は、いささかも神の御業を妨げることはなかったのです。

v.5「彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。」

私たちは“不信仰”という強力な現実を目を奪われてはなりません。私たちは実際、そのような現実と妥協しながら教会活動の労苦を共に担って行きます。しかしそのような“不信仰”の現実はそのままに……、神の救いの御業はいささかも妨げられることなく、今日も神の国の到来の日を目指して進められていることを信じようではありませんか。

神は、罪によって「倒れていた世界を、キリストの死によって新しいいのちに立ち直らせてくださいました。」(今朝の各年共通用集会祈願)

信じる者を神の国への復活の日に向かって歩ませてくださる聖霊の慰めが、私たち一同と共にありますように。 アーメン、ハレルヤ。

7月16日 年間第15主日

アモ 7:12～15 エフェ 1:3～14 マコ 6:6b～13

1. マコ

私たちは12人の派遣の物語りに、初代教会で活躍した多くの福音宣教者たちの姿の原形を見ることが出来ます。使徒たちを中心としてこれを取り囲む福音宣教者たちが、復活の主イエスによって召し出されて、当時の地中海世界の各地に遣わされて行きました。

vv.8-9

これは福音のための奉仕の働きの職業化への拒否であって、この考え方は今日に至るまで教会のすべての奉仕の働きの基本的な考え方となっています。

vv.12-13

私たちは代々の時代の司教および司祭たちが、この12人と同じ働きのために召し出され遣わされ続けて来たということを考えたいと思います。現代の私たちの教会においても、それは同様であるはずで、「復活の主によって召し出され遣わされている」という理解が、私たちが司教や司祭を見る場合の視点でなければなりません。

2. アモ

預言者アモスの証言も、同様のことを証しています。

v.15 「主は家畜の群を追っているところからわたしを取り、「行って、わが民イスラエルに預言せよ」と言われた。」

イスラエルの王国時代において、一般に預言者と呼ばれる人々はいわゆる職業預言者たちでした。しかしこれは決して特殊事情ではないのです。いつの時代でも、その時代の国家の宗教に関係する祭司たちや預言者たちは、それを職業とするのが一般的でした。しかしヤーウェの預言者には同時にもう一つの面、彼らがヤーウェによって召し出され遣わされたという面がありました。そしてこの事実が、彼らの預言を力あるものにしたのです。

3. エフェ

今朝の第二朗読で私たちが聞いたこのテキストは、福音の喜びが満ちあふれている個所であります。私たちはミサの中で感謝の典礼においてキリストの御聖体に共に与かりますが、それによって「神はわたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たして」(v.3) くださいます。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(v.7)。そして「神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、「秘められた計画(ミステリーオン)」をわたしたちに知らせ

てくださいました」(vv.8-9)。ミサに参加している私たち一同は、“約束されたもの(神の国)の相続者”なのです(v.11)。

しかしここで私たちは、自分たちがこれまで歩いて来た 20 世紀の教会の中での信仰体験を振り返って眺めて見なければなりません。「神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、“秘められた計画(ミステリーオン)”をわたしたちに知らせてくださいました」(vv.8-9)という体験を、(正直に言って)私たちはして来たでしょうか。むしろそれは私たちの実感からは遠いこと……、語られることなく聞かれることもなしに過ぎて来たというのが事実ではないでしょうか。

そのような私たちに、今朝のミサの朗読聖書は語りかけているのです。説教する司祭も、ミサに参加している信者一同も、共に今朝の朗読聖書に耳を傾けて信仰の目を開きたいと思います。年間第 15 主日の各年共通用拝領祈願は、「主の過越を記念するたびに、救いの業がわたしたちの中に力強く実現していきますように」となっています。これは恐らくレオ秘跡書で、「教会がキリストの死と復活の記念を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます」と言われているところに由来する、期待の祈りであります。21 世紀の教会は「暗やみにさまよう人たちがまことの道に立ち帰る」(各年共通用集会祈願) 時代を迎えるに違いないと、期待しましょう。神が「この恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、“秘められた計画(ミステリーオン)”をわたしたちに知らせて」くださいますように。

アーメン、ハレルヤ。

7月23日 年間第16主日

エレ 23:1~6 エフェ 2:13~18 マコ 6:30~34

1. エレ

ダビデ王は、神の民イスラエルの統合の象徴であります。イスラエルの民はダビデの王国の民であり、そのダビデの子孫の中からメシアであるイエスも誕生されました。この歴史の事実を、現代のキリスト者である私たちは思い起こさねばなりません。

vv.5-6 「見よ、このような日が来る、と主は言われる。

わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。

王は治め、栄え、この国に正義と恵みの業を行う。

彼の代にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。

彼の名は“主は我らの正義”と呼ばれる。」

父なる神はイスラエルを救って、モーセの契約によって約束されていた祝福を受け継がせるために、ダビデの子孫の中からメシアを起こすことを約束されました。ここで用いられている“正義(ツエデク)”という言葉は、“イスラエルの救いの実現”のことを意味しています。

ですから救い主イエス・キリストは、救われ集められた新しいイスラエルの民の王であり、牧者なのです。

2. エフェ

今朝の朗読箇所である vv.13-18 は、その直前の vv.11-12 を前提に語っていることを知る必要があります。それをここに引用しましょう。

「だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、…… そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。」

私たちは教会の救いが、元来のイスラエルの救いが異邦人にまで拡張されたものだということを、よく考える必要があります。私たちは洗礼の秘跡によって新しく生まれるまでは、“イスラエルに属さず”、“約束を含む契約と関係ない”、単なる異邦人でありました。イエス・キリストの救いは、そのような異邦人であった私たちを神の民イスラエルと一つに結びつけてくださり、共に父なる神に近づくことが出来るようにしてくださったのです。私たちは自分たちが受けた洗礼の秘跡を、またこうして主日ごとに共にささげているミサを、このようなイエス・キリストの救いと固く結びつけたものとして理解したいと思います。

3. マコ

v.34 「イエスは船から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろ

いと教え始められた。」

神の子イエス・キリストは、神の民イスラエルの牧者となるために来られました。飼い主のいない羊のような群衆を、新しいイスラエルとして御自分のもとに集めるために、主イエスは神の国の福音を宣べ伝えて十字架に至る道を進まれたのです。

この“飼い主のいない羊のような群衆”の中に私たちも含まれていたからこそ、そして主イエス自らが私たちのところに来て神の国の福音を宣べ伝えてくださったからこそ、私たちは今その救いを受けてミサをささげる群となっています。キリストの血による新しい契約に与かって、私たちは将来の神の国の相続者である新しいイスラエルの民となりました。十字架と復活の主イエス・キリストは、異邦人であった私たちを旧約のイスラエルと一つに統合して下さり、かつての旧きイスラエルの統合の象徴であったダビデの王座に着いてこれを支配しておられます。

私たちは今朝のこのミサで、ダビデの王座に着いて私たち新しいイスラエルを支配しておられるイエス・キリストにお会いします。私たちはこの方に向かって“あわれみの賛歌”を歌って今朝のミサをささげているのです。 アーメン、ハレルヤ。

7月30日 年間第17主日

王下 4:42~44 エフェ 4:1~6 ヨハ 6:1~15

1. ヨハ

イエスが5千人の人々に食べ物を与えられた物語りは、すべての福音書に記録されていますが、ヨハネ福音書だけが大麦のパン五つと魚二匹とを持っていた少年のことを述べています。

それはこの大麦のパン五つと魚二匹が、どんなにとるに足りないものであったかを説明するための脚色であったかもしれません。こんなに大勢の人々に食べさせて、彼らを満腹させるには、殆ど価値のないものに過ぎませんでした。しかし、それを主イエスが受け入れて用いてくださったとき、人々は満腹するまで食べて、なお残したのでした。

この出来事を見た人々は、そこに神の国のしるしを見ました。教会は主イエス・キリストの代理者である司祭がミサにおいて御聖体のパンを人々に分け与えるとき、そこにいつも神の国のしるしを見て来ました。あなたがたは「一つの希望にあずかるようにと招かれている」と、エフェ 4:4 に述べられている通りです。

2. エフェ

エフェソの信徒への手紙で使徒パウロは、教会というものが招かれて一つに結ばれた群であることを強調しています。共にミサをささげる群である教会は、キリストの霊の導きを受けて神の国の希望を共有しています。教会は神の国へと招かれているのであって、「その招きにふさわしく歩み、…… 霊による一致を保つ」ことが勧められています(w.1-3)。

真のキリスト教会は“ただ一つ”であって、様々なキリスト教会があるわけではありません。教会は“一つの希望”に与かるようにと招かれているのであって、様々な希望、様々な信仰があるわけではありません。各地の諸教会で主日のミサがささげられるために、司祭と会衆が集まって来て囲むキリストの祭壇は“ただ一つの祭壇”であって、様々な祭壇があるわけではありません。その祭壇から、代々の時代のキリスト者たちは同じキリストの御聖体を拝領して、キリストの体である“一つの教会”に造り上げられて来ました。

このように、教会の一致の中心にあるものは主日のミサであります。ですからミサの一致が存在しないところには、教会の一致も存在しないのです。様々なキリスト教会、様々な信仰という“様々な立場”を受け入れることによって、ミサの一致とは別の次元でキリスト教諸派の一致や合同を促進しようという考え方は、決して適切なエキュメニズム(教会一致運動)理解ではありません。

3. 王下

北イスラエルで 紀元前9世紀に活躍した偉大な預言者エリシャについては、列王記下に多くの伝承が伝えられていますが、今朝の朗読箇所もその中にある奇跡物語りの一つです。この物語りにキリストの福音の

2000年7月(主日B年)

光が当てられたとき、新しい発見があったことを私たちは容易に理解することが出来ます。今朝のヨハネ福音書のイエスの奇跡を指し示す予言ないし予兆のようなものを、キリスト教会はここに読み取りました。

そして王下の物語りも、ヨハネ福音書の物語りも、私たちのミサの中の感謝の典礼を説明し、私たちがキリストの御聖体によって罪の赦しと永遠の命を受けていることを信じさせてくれるのです。全世界の教会で主日のミサをささげている会衆は、確かに終わりの日に神の国を受け継ぐキリストの民であることを信じて、心から感謝しましょう。 アーメン、ハレルヤ。